酒をめぐる断想

父は全く酒を飲まなかった。体質的にアルコールを受けつけないたちだったのだろう。わが家の食前に酒が登場することはなかった。奈良漬を食べて顔を赤くした父の姿がいまでも目に浮かぶ。私はこうした環境に育ったためか、空き腹のときなんかビールならコップ一杯で真っ赤になり、道もまっすぐには歩けなくなる。西部劇でカウボーイがぐっとバーボンを一杯ひっかけて、その足で決闘におもむく。あれを真似して私がヘネシーを一気に飲んで役場に出掛けたら、用件を全く思い出せず、すごすごと帰宅した。生まれたときは丸はだかで誰でもスタートラインはいっしょのはずである。どの辺の段階で訓練されて差が出てくるものであろうか。

酒は人間の集団生活に極めてかかわりが深いことを強く感じるこの頃である。実に多面的な魅力を備えていて、楽しみ方はたくさんあることを日の浦の人々から知らされた。酒は人間が口にすることによって、生活に楽しみを与え、生活を豊かにし、一日の疲れをいやしてくれる反面、いろいろとマイナスの面も持つ特殊なものである。「どこが気に入ってご主人と結婚したんですか」と或る人が妻に尋ねたら「酒を飲

まないから、それだけっ」といとも簡単明快に笑いながら言ったことがある。他にはなんの取柄もない男のようで、当時の私はかなり落ち込んだものだ。

自分が飲めないからといって、飲む人の方が間違っているかのように言ったり、思ったりはしない。

日の浦の女性軍がいかにもうまそうにウイスキーの水割りを飲むのを幾度か見ているうちに、最近少し心境の変化を来たした。海外旅行の土産に貰ったヘネシーを飲んでみたら、意外にうまいのに驚いた。早速洋酒に関する本を数冊買い込んで勉強を始めたらなかなか面白い。ウィスキー・ブランデー・ワインの製造工程など、下手な随筆より興味が湧いて来た。

デパートに入ると先ず洋酒部門を見て廻るようになった私の変化に、妻や知人があきれたような顔をしている。ルーマニヤのチャウシェスク夫妻の私邸の宴のあとの写真に、レミー・マルタンの空箱がころがっていたのが印象に残るほどになった。

私は晩酌をしたことがない。男が家に帰って、妻子を前にチビチビやりながら、一家を支えているという責任感に浸りつつ「今日も一日よく働いたなあ」などと上機嫌で話したりするのは、それはそれでいい。だが仲のいい友だち二人か三人で財布にあまり影響を与えないような場所で、上役の悪口を酒のサカナにして飲むのもうまいのではないかと思う。これは、多くの人が実行している。どこの飲み屋に行っても、上役の悪口はいっぱい充満している。それが人生なのかも知れない。

酒はふんいきで飲むものだという人は多い。いちがいにそうとも言いきれまいが、一理はあろう。

夫が酒を飲み、妻が泣いて止めるといった酒を挟んで女性対男性が敵対する構造が最近ではあまり見ら

れない。かつては妻子がどんなに貧しいものを食べていても、自分の前には酒とさかなが並んでいなければ承知しない人もいたし、酔えば酔ったで、妻子に当たり散らした人もいた。そんな夫たちの酒に、さんざん泣かされて来たのだが夫の死んだあと、いつのころからか晩酌を始め、少量の日本酒を楽しんでいる人もいる。

随筆家のM氏は他人に迷惑をかけずに、まわりの人々をすばらしい雰囲気に巻き込むほれぼれする飲み方をする人である。そのM氏が忘年会の場で次のような話をした。

酒好きだった友人が入院した。医者から酒は禁止されていたが見舞いにやって来る人々に「おい頼む、ほんの少しでいいから飲ませてくれよ、なめるだけでいいからさ」と言い周囲を困らせた。あんまり可哀想だから飲ませてやろう、と奥さんや友人たちが決意したときは、もう飲める状態ではなかった。ものが言えなくなった彼に奥さんはとりすがって、ご免なさい、ご免なさいと悲痛な声で泣き叫んだ。あのとき少しだけでも飲ませてやればよかったと、残された奥さんは悔やみ続けたという。

この話を聞いて、007のジェームズ・ボンドが「酒が飲めなくて死ぬより飲みすぎて死ぬほうがいい」と言った言葉が頭に浮かんだ。それほどまでに、酒好きの人が飲みたいと思う酒の味を、私はわからないままに年を重ねて来た。

体調の悪いときの酒や、気に染まない相手と飲む酒はいかなる名酒であろうと、舌には苦いのではないだろうか。逆に盛りあがった愉快な席で酌みかわす酒は、すばらしい味になろう。

「誰でも二度とは生まれてこないこの世だから、できるだけ永く生きて飲みたいのは当然である」と知

人は言う。歳の暮れには、忘年会が多くて疲れて仕方がない。そのための出費もまた相当なものだと、酒の好きな面々は嬉しさをかくして、一応困ったような顔をして見せる。ふだんいっしょに働いている人が集まって楽しく飲み、いい気持になって夜の街を歩くのも無意味ではないと二日酔いの頭をふりふり強調する。

コーヒーを飲みながら人を待つのは、長い間の私の習慣であるが、豊かな香りと品格のある味わいを持つ類いまれなスコッチを、じっくり楽しみながら人を待つという楽しみも、いくらかわかるようになってきた。

当時海軍工廠の総務部にいた私に、赤紙がきたのは昭和十七年の四月。太平洋戦争は五ヶ月前に始まっていた。島でも出征兵士が出ることは珍しくなくなっていた。赫々たる戦果が報道されていた時代であり、私の感傷など入りこむ余地は全くなかった。伊万里駅で多くの人たちの万歳の見送りを受けたが、母は少し離れてひとり立っていた。そのときになって初めて母の老けこみに気がついた。若かった頃の母の姿をなぜか思い出した。母は頻りに眼をしばたたいては、あらぬ方を見ていた。私は母を見ていられなくなった。前夜の最期の夕飯の折に「自分から死のうと思うなよ」これが私の出征に当っての母のひと言であった。当時の風潮に対する母の精一杯の反抗の言葉ともとれたし、血を分けた母親の本能的な愛情が言わせた言葉ともとれた。

父と二人駅を離れていく汽車に乗り込むと、さまざまな想いが交さくした。この汽車には実にいろいろな人が、さまざまな気持で乗っているに違いない。そんなことを思った。

小学校の低学年のころ、姉に悪態をついたらよほど腹にすえたのか「お前はね。ほんとうは捨て子だったとばい、炭坑の空納屋に捨ててあった赤ん坊ば可哀想かと言うて、母ちゃんが育ててくれらしたとばい。その証拠にうちのもんは、右兵衛・左兵衛と名が付いとるとに、お前だけ諭吉と付いとるじゃろが、わかったね」当時の私にとって、これ以上の打撃はなかった。人生の一大事として、本気で悩み続けた。二年近くこの事が頭から離れず親に逆らうことは全くできなかった。生きて再び故郷の地を踏むことができれば、姉に笑いながらこのことを話したい、そう思った。

大村の宿に着くと父のあとについて、玄関に入り、その頃では珍しい真新しいタタミの匂いが籠る部屋に案内された。ここでしか話されないことが山ほどあるような気がしていたが、向き合って間近に顔を合せてしまうと、気持が昂って容易に言葉にならず、父の方も言いたいことがありそうだが抑えている様子であった。

「明日入隊ですか、これは私のお祝いです」と宿のおかみさんが一本の銚子を食卓に置いた。私たち父子はお互いに顔を見合わせ、この一本の酒をじっと見つめた。その夜が父と子の初めて酌みかわす盃であった。父が一杯、子が二杯、それ以上は苦くて飲めなかった。

翌朝、私たち父子は肩が触れるほど隣合せに並んで大村連隊の正門への道を歩いた。ずいぶん長い間黙り込んだまま、とぼとぼと歩いた。息詰まる感じから逃れるために「もうここでいい」と私は小さな声でつぶやいた。父は立ちどまり、目を閉じた。父とはもう二度と顔を合わせることはできないのではないか、ふとそんな気がした。私はその横顔を、鍛の多くなった口許や禿げた頭を見つめた。生涯にたった一度で

はあったが父の頬に、一筋の涙が伝わり落ちたのを私は見た。この時の父の表情はいまでも思い浮べることができる。父はしばらくためらったあと、やがて引きずるような足どりで今きた道を引き返して行った。私は後を振り返らなかった。

激しい三ヶ月の訓練のあと、戦地へ向ったが復員するまでの四年間一度も便りをしなかった親不孝な私であった。復員して「ただいま」と声をかけたら、私が死んだものと諦めていた父は荘然としていたが、生還を信じていた節のある母は、当然のような顔で「お帰り」と大きな声を出した。その夜の食卓にも酒はなかった。復員して一年三ヶ月で父はあっけなくあの世へ旅立った。現在の私より若くして逝ったが、そのぶん母が長生きをしてくれた。

この秋、二日市温泉で戦友会をやった。私が飲めないのは承知だとばかり、戦友たちは私のコップにウーロン茶をなみなみと注いでは同情的な目で見つめた。飲めないさみしさを、ちょっぴり味わって再会を約した。戦争が終り、四十五年の歳月が過ぎた。戦争の記憶はすでに遠い遥かなものになってしまったかも知れないが、いかに歳月が褪せて行こうとも私の脳裏には、時として故郷の父母や愛する妻子を案じ、郷土の酒を想いつつ果てて逝った人たちの、凄惨とも言える記憶が甦る。